提出日　平成 ２５年 ４月 ９日

平成２４年度　総合文化研究所研究助成報告書

研 究 の 種 類（該当に○）

海外共同・共同研究・個人研究・出版助成

研 究 代 表 者（所属・職名・氏名）

国際学部　教授　谷中寿子

研 究 課 題 名

アメリカ南部の高等教育機関における人種的多様性の構築

研 究 分 担 者（共同研究者）

なし

研 究 期 間

2012 年 4 月～2013 年 3 月

研究を実施することになった経緯（海外共同の場合のみ記入）

研 究 組 織　　［ 氏名，所属，役割分担 ］
谷中寿子　共立女子大学国際学部　研究の全て
研究発表（印刷中も含む）　雑誌及び図書
2013 年 10 月　目白アメリカ研究会にて、口頭発表の予定

研究実績の概要

この研究に応募するにあたって、2011 年 12 月にニューヨーク州ハーレムにあるショーンバーグ黒人文化センター（Shormburg Center for Research in Black Culture）で予備調査を行っていたので、そこで得た文献検索や情報に基づいて、まず、2013 年 4 月から、高等教育におけるアフリカ系アメリカ人、南部の大学教育における黒人学生、特に、高等教育における黒人女子学生についての文献を収集し始めた。Peter Wallenstein, *Higher Education and the Civil Rights Movement: White Supremacy, Black Southerners, and College Campuses* (Gainesville: University Press of Florida, 2007) や "The African American Female Elite: The Early History of African American Women in the Seven Sister Colleges, 1880-1960," *Harvard Educational Review,* 67-4 (Winter, 1997) を始め、多く著作や論文により、高等教育機関における黒人学生の排除と統合の歴史を学んだ。特に黒人女子学生が北部の伝統的に白人女子大学であった高等機関に、20 世紀になって形ばかりの人種統合の証拠（token）として入学が許可され、徐々にその数が増えていく過程を分析した研究などから、1960 年代末から南部社会が人種統合をせざるを得ない状況に追い込まれていく状況を分析する際の理論的視座を会得した。さらに南部社会の特殊性を考慮する必要から、南部における公民権運動、それに対する南部白人の抵抗運動、その思想的基盤である根強い白人優越主義の存在について、考察を進めた。

2013 年 3 月 16 日から 31 日まで、ジョージア州アトランタに出張し、この研究のケーススタディーとして選んだアグネス・スコット大学（Agnes Scott College）を中心に調査をした。アグネス・スコット大学図書館の古文書室で、1950 年代からの（1954 年最高裁のブラウン判決で人種隔離教育の撤廃が確定したので）アグネス・スコット大学の人種統合教育に対する姿勢、状況を調査し始めた。まず、大学当局の公式見解を知るために、「学長レポート」（President's Report）を収集した。1965 年以降のものはデジタル化されていないので、それ以降の学長レポートを文献複写した。さらに、1950 年代から 60 年代にかけて公民権運動が盛んな頃やブラウン判決が下されたこと、1965 年に初めて黒人女子学生がアグネス・スコット大学に入学を許可された時のこと、その後、数人の黒人女子学生が在籍し、次第にその数が増えていく状況、1980 年代末から人種的多様性（diversity）が提唱されていくという時代経過の中で、白人、黒人双方のアグネス・スコット大学生たちがどのように対応し、どのような意見を持っていたのかを探る目的のために、学生自治体によって発行されている「学生新聞」（"*The Profile*"）を見始めた。人種、偏見、差別、公民権運動とその指導者たち（マーチン・ルーサー・キングなど）、コミュニティや大学における多様性などについて学生が執筆した社説記事や投稿記事、そしてアフリカ系アメリカ人に関する学校行事についての記事を文献複写した。そして、近年、大学が積極的に進めている多様性プログラム（Community Diversity Program）に関する資料を学長室の委員会（President's Committee on Community Diversity）から取得しようと試みた。1950 年代から 2000 年頃までの資料収集はやり終えたが、2000 年以降の「学生新聞」の精査と近年の大学の政策に関しては、時間が不足し、やり終えていないので、もう一度、アグネス・スコット大学に調査に行く必要がある。

以上のような文献収集と同時に、今回の調査において、アグネス・スコット大学関係者のインタビューを事前に準備していった。約 20 年間から 30 年間にも及ぶ長期のあいだ教えている教授たち、数年前に赴任してきた教授、40 年間以上、学校の食堂で働いている職員たち（アフリカ系アメリカ人）、現在在籍している白人学生と黒人学生などから彼女たちの経験と意見を聞き取り調査した。さらに、卒業生にもインタビューしたかったので、現在はアトランタを離れている卒業生の連絡先を入手した。これからメールなどで、彼女たちの経験・意見を取得する予定である。

さらに、歴史的に白人女子大学であったアグネス・スコット大学と黒人女子大学であるスペルマン大学（同じアトランタにある歴史的に有名な黒人女子大学、創立時期はアグネス・スコット大学と同じ 1880 年代であるが、現在でも 90%以上の在校生がアフリカ系アメリカ人女性）とを比較し、アグネス・スコット大学で白人女子学生と一緒に学んでいる黒人女子学生の特徴（大学選考の理由、アフリカ系アメリカ人としての意識、将来の目標、アメリカ社会に対する意識など）を探りたいと計画している。そのためには、スペルマン女子大学の学生たちや、アグネス・スコット大学とスペルマン大学の双方の学生を客観的に見ることのできる立場の人として　両校に派遣されている UNCF-Mellon Teaching Fellows（United Negro College Fund の黒人教員要請プログラムによる非常勤講師たち）にインタビューする準備をしている。

以上のようにこの 1 年間、文献収集と分析、インタビュー調査をしてきたが、1 年間の研究期間は短すぎて、まだまだやり残していることが多い。従って、今後もこの研究を続ける必要があるので、2013 年 8 月に、再度アトランタに出張する予定である。また、これまで収集した資料を分析・考察し、論文執筆の準備にも取りかかる予定である。